

常照

第773号

親鸞聖人のお手紙

親鸞聖人が京都へお戻りになられてから関東の門弟もんていに宛てた手紙が現存しておるようです。『御消息集』『血脈文集』『末灯鈔』まつとうしやうとか色んな呼び名でまとめられてその数四十三通だそうです。

中身をたずねてみますと、門弟からの問いに答えていらつしやるものや、こんな書物があるからよく読んでみて

くださいと度々たまにお薦めすすになつてゐる場面、身辺のことを書き添そえられている部分などもあるようです。同じくお念仏をよろこぶ仲間の中での解釈かいしやくの間違いを正す文章などを拝見すると、当時の時代背景が少なからず見えてくるようです。余談よだんではありますが、親鸞聖人はご自身の思いを語る文章が非常に少なかったと言われております。では、そのお手紙には、どんな言葉が記されているのでしょうか？

念仏そしらんひと

あるお手紙の中にはこんな言葉が残されています。いわく、「念仏を誇そしる

人が助かるようにとお考えになって、念仏をなさってください」と。最初のこの文章を見た時、びっくりしました。言ってみれば、「お念仏？阿弥陀さま？それが何だと言うのだ。私はそんなものは信じないしアテにはしないよ」と、念仏を誇る人に対して、非難するでもなし、無視するでもなしに助かるようにお考えになってとはどういう見だろわかと首を傾けたものです。しかしそこにはやはり大事なメッセージが込められているのでした。

猿の話

こんな面白い例え話があります。お

釈迦様のお弟子さんたちが毎日瞑想の修行に励んでいたときの事です。

ある朝、お釈迦様が「いつも瞑想のときは何も考えないようにと言っているけれど、今日は何を考えてもよい。どんな悪いことや淫らなことを想像してもよい。ただし、【猿】のことだけは考えないように」と言ってその場を離れられた。お弟子は一日中「猿のことを考えてはいけない、絶対猿のことだけは考えないぞ！」と思いながら瞑想してしまい、結局は猿のことばかりを考えてしまったようです。夕暮れになつてお釈迦様が戻つてみると、そこには瞑想している猿の群れがいたとい

うのです。つまりお弟子さん全員が猿に変身してしまつたのです。

思えばこの逸話(いっわ)は人間の心の性質をうまく表していると思います。人間の心とはそれほど制御が難しいものなのです。お釈迦さまはその事を伝えるためにあえて猿の話(はなし)をされたのでしよう。お釈迦さまの仰(おほ)せを一生懸命聞こうとされた真面目なお弟子さんほど、猿のことを払拭(はらひ)できずに悩まれたのかもしれない。この話を先ほどの念仏を誘(いざな)うる人に置き換えてみますと…。

気にする私

さてどうでしょう？ 前述のように念

仏を誘(いざな)うる人と対峙(たいじ)すれば私はきつと腹をたて、あるいは納得いくまで理由を聞こうとするかもしれません。もしくは説得(せつとく)や論破(ろんぱ)しようなんて思いたつたかもしれません。それでも伝わらなければ「あの人は駄目だ」とレッテルを貼(は)つてしまふ恐れだつて充分に考えられます。

何だつたら、普段の何気ない会話の中でも価値観の違いでこんな風(ふう)にモメることはしよつちゆうです。こちらが意地(いぢ)を張れば張るほど相手も意地(いぢ)を張り、原因は何だつたのか？ 伝えたかつた真意(まごころ)は何だつたのか？ どんどん遠ざかつていく気がするの

です。念仏を誘う人が助かるように
と：と親鸞聖人が仰った背景にはそ
んなメツセージが隠されているので
はないかなと思うのです。私達はい
つ、どのような縁で阿弥陀さまの
お慈悲に出会えるかわからないので
す。ただ誰かが阿弥陀さまの願いに
出会うべきタイミングに私が邪魔を
してはならないのです。「いつか出
会える時」が来ることを親鸞聖人は
願っておられたのではないか。そん
な風に聞かせてもらった時に何より
も先に自分が慶べるものにキチンと
出会わなければいけないなあと感じ
たことでございます。

六月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 六月七日(木)～十一日(月)

講師 熊本教区球磨組聚教寺

恒松見照 師

○後期 六月十三日(水)～十六日(土)

講師 四州教区飯山南組源正寺

片山英道 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただ
き、ご聴聞に来院くださいますよう、お待ち
しております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇一三四) 二二一〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一番